

—実践報告—

高齢者看護学実習Ⅰにおける看護学生の学びの特徴

—生活者である施設利用者との関わりを通して—

吉崎文子 太田節子

滋賀医科大学医学部看護学科臨床看護学講座

要旨

本研究の目的は、高齢者看護学実習Ⅰにおいて学生が生活者としての高齢者に関わる中での学びの特徴を明らかにし、より効果的な臨地実習指導の方法を検討する事である。研究協力を承諾した看護学生の実習記録を対象とした。分析は学生の実習記録を精読し、一文一意味の文章に要約しコードとした。さらにコードを研究目的に沿って分類・整理し、それらをカテゴリー化した。3日間の施設での実習で、学生は高齢者との関わりや、高齢者とスタッフとの関わりから以下の事を学んでいた。【高齢者の特徴を体感】【生活の場を体感】【こまやかな観察】【非言語コミュニケーションの体得】【環境整備の工夫】【個別性を尊重した関わり】【人生の先輩として尊重する姿勢】の7つのカテゴリーである。今回、新カリキュラムにおける高齢者看護学実習Ⅰにおいて、学生は、施設で実際に生活をしている高齢者に関わる中で、より生活機能に重きを置き対象者を見つめる事を学んだと考えられる。今後この視点を高齢者看護学実習Ⅱに生かし、発展させていく必要性が示唆された。

キーワード：高齢者看護学実習，学生の学び，介護老人保健施設，介護老人福祉施設，生活機能

はじめに

2009年度の改正看護教育カリキュラム(以下新カリキュラムとする)において、基礎教育の基本的な考え方として、「看護の対象者を健康を損ねている者としてのみとらえるのではなく、疾病や障害を有している生活者として幅広くとらえて考えていくこと」¹⁾を第一に掲げ、人々の「生活」を理解する事が加わった。また、老年看護学での留意事項として「特に生活機能の観点からアセスメントし、看護を展開する方法を学ぶ内容とする」²⁾事が示され、看護の対象者を生活者という視点でとらえることを重視する事の必要性が明確に示された。

このような流れを受け、本年度より臨地実習実施前の新カリキュラムの学生を対象に高齢者看護学実習Ⅰを行った。本実習の中で、生活者としての高齢者を理解するために、高齢者施設での実習を3日間実施した。

研究目的

本研究の目的は、学生が生活者としての高齢者に関わる中での学びの特徴を明らかにし、より効果的な臨地実習指導の方法を検討する事である。

実習の概要

1. 実習目標

「高齢者施設における高齢者とのコミュニケーションや日常生活援助を体験的に学習する」、「社会貢献を果たしている医療及び介護施設の意義と看護職及び介護職の役割を学習する」の2点である。

2. 実習方法

高齢者看護学実習Ⅰは、臨地実習実施前の9月に2週間行った。高齢者施設での実習期間は2週間のうちの3日間である。

学生は2名～6名に分かれて、介護老人福祉施設、介護老人保健施設にて実習を行った。学生は担当の高齢者を受け持つことはなく、出来るだけ多くの高齢者に関わる時間を重要視した実習となっている。

研究方法

1. 研究デザイン

質的記述的研究を用いた。

2. 研究対象

高齢者看護学実習Ⅰを修了した第3学年の学生56名に研究の趣旨を説明し、研究協力を承諾の得られた学生の実習記録。

3. データ収集方法

その日受けた指導やケア実施内容を整理し、1日の学びと振り返りを記述した学生の実習記録から、研究者がランダムに抽出した。データの抽出は、研究者が、データが飽和したと感じるまで行った。

4. 分析方法

実習記録を精読し、一文一意味の文章に要約し、コード化を行った。これらのコードを研究目的の視点に沿って分類・整理しカテゴリー化を行った。この作業は研究者間で話し合いながら行った。

5. 倫理的配慮

学生に口頭にて研究目的、方法、研究協力は任意であり、成績には無関係であること、またデータは学生を特定できないように配慮すること、研究以外には使用しない事、データは施錠できる場所に厳重に保管し、研究終了後は裁断処理することを説明し文書にて同意を得た。

結果

1. 対象者の概要

56名の学生中、研究に同意を得られた学生の記録よりランダムに抽出した16名の記録。16名の学生は全員女性であった。

2. 学びの特徴

学生16名の実習記録より、高齢者と関わる中で学びの特徴として抽出されたコードを分析した結果、7つのカテゴリー、19のサブカテゴリーが抽出された。以下カテゴリーを【】、サブカテゴリーを<>、コードを「」で示す。学びの特徴をまとめたものを表1(別紙)に示す。

1) 【高齢者の特徴を体感】

学生は、知識として学んでいた高齢者の特徴を、実際に<直に関わる中で特徴を実感>していた。そして、繰り返し話をされたり、大声をあげたりされる行動の前後を通して関わる中でその<言動の背後にある意味への気付き>を行っていた。

2) 【生活の場を体感】

学生は、高齢者と同じ時間を共有し、「車いす生活の中でも利用者が生き生きと生活している」姿等を見て、施設が<生活の場である事を実感>し、また一人ひとりに生活のリズムがあり、生活者として生活を営んでいる事を学んでいた。そしてレクリエーションなど<日常生活の中のリハビリ>に参加をする事を通して、病院とは異なり、施設が生活の場である事を体感していた。

3) 【こまやかな観察】

学生は、高齢者の状態はその都度変化があり、<

表情や反応を観察しケアに反映>させる事の必要性や、そのために「食事介助の際、喉元が見えるように衣服を整える」などの<状態を汲み取る工夫>を学んでいた。また入浴介助や排せつ介助などの<ケアを利用し全身状態を観察>する多面的な視点も学んでいた。

4) 【非言語コミュニケーションの体得】

学生は、3日間の中でコミュニケーションの方法を試行錯誤しながら、ジェスチャーを取り入れたり「視線や指さしで意思疎通を図る」などの<非言語コミュニケーションの実践>を行っていた。そして、<コミュニケーションツールとして自己を認識>し、コミュニケーションの際の自分の表情なども意識し関わる事の有効性に気付いていた。

5) 【環境整備の工夫】

学生は、高齢者の安全・安楽を守るために<手順や物品を工夫>する事や、<残存能力を引き出す環境整備>を行うなど、少しの【環境整備の工夫】で、高齢者の残存能力を引き出す事が出来ると学んでいた。

6) 【個別性を尊重した関わり】

学生は、多くの高齢者と関わる中で、一人ひとりの<個別性を実感>していた。そして、その個別の<残存能力に応じて関わりを工夫>する事の必要性に気付いていた。関わりとしては肯定的なフィードバック>や<ペースを尊重したケア>、<声かけの大切さ>を具体的に学び、実践していた。

7) 【人生の先輩として尊重する姿勢】

施設が病院とは異なり、生活の場である事を体感した学生は、高齢者が施設の中でも役割を持っていきいきと生活される姿を見て、<生活における役割の大切さ>を学んでいた。またコミュニケーションが取れなくても、相手に向き合い<相手を理解しようとする姿勢>を指導者の姿や日々の関わりから学んでいた。そして高齢者を<人生の先輩として尊重>していた。

考察

1. 高齢者看護学実習Iにおける学びの特徴

現在、核家族化が進み、高齢者との同居経験が少ない学生が増加している。また例え同居をしても接触がないため高齢者の生活を具体的にイメージ出来ない状況にある³⁾とされている。今回学生は、実際に施設で高齢者と関わる中で、【高齢者の特徴を体感】、【生活の場を体感】し、座学で学び得ていた知識との統合を図っていた。また、高齢者に対し【こまやかな観察】を行い、それをケアや自己のコミュニケーションに反映をさせていた。そのような中で、

【非言語コミュニケーションの体得】も関わりを模索しながら行われていた。これらより実習目標にも掲げている、高齢者とのコミュニケーションや日常生活援助の体験的な学習を行っていたと考えられる。

高齢者看護実習の多くは、慢性疾患や障害を持つ高齢者が対象である。治癒する見込みの高い疾患とは異なり、疾患や障害を持ちながらも、その人らしく生活を営む事が出来るよう支援する事が大切である⁴⁾とされており、高齢者看護の実践の原則は「自立支援」であると北川⁵⁾は述べている。高齢者看護においては、出来ない部分を補う看護ではなく、出来る部分を見出し、見守る看護の視点が特に重要となる。学生は施設での実習を通して、高齢者の残存能力を引き出すために【環境整備の工夫】や【個別性を尊重した関わり】の重要性、自立支援の視点を学んでいた。これらの視点からの看護は、幅広い視点から高齢者を捉え、多面的にアセスメントを行うことが必要とされる。そのためにも教員や指導者は、実習での一つひとつの体験が意味ある体験になるよう、体験の意味づけをして行くプロセスを学生が踏めるよう支援していく必要がある。

3日間を通して、学生は多くの高齢者と関わり、洗濯たみなどの役割を持ち生き生きと過ごされている高齢者の姿や、戦争体験など人生経験が豊かな高齢者の話を聞く中で、自然と【人生の先輩として尊重する姿勢】を身につける事が出来ていた。これは、高齢者とスタッフとの関わりを観察も大きく影響していると考えられる。たとえ言語的なコミュニケーションが取れない場合であったとしても、相手を理解しようと努力し、関わりを模索することの必要性を学生は体感していたと考えられる。

高齢者への看護は、あくまで高齢者自身の人生の完成への歩みを支援する視点が必要である。そのためには生活機能の観点から高齢者をアセスメントする事が必要とされる。今回、新カリキュラムにおける高齢者看護学実習では、病院ではなく施設で、疾病や障害を有しながらも、個々の生活リズムを大切に、持てる力を最大限に活用しながら実際に生活を営んでいる高齢者との関わりを通して、学生はより生活機能の観点に重きを置き、それを支援する関わりを学ぶ事が出来たと考えられる。

今後、高齢者看護学実習Ⅱにおいて、この学びを生かした看護過程の展開、思考プロセスが踏めるよう指導していくことが必要である。

結論

学生の記述した実習記録より、生活者としての高齢者と関わる中での学びの特徴として以下の事が明らかとなった。

学生は3日間の、高齢者施設での実習を通して、施設での生活者である高齢者と関わる中で【高齢者の特徴を体感】【生活の場を体感】し、看護のスキルとして【こまやかな観察】【非言語コミュニケーションの体得】【環境整備の工夫】【個別性を尊重した関わり】を学んでいた。また高齢者と触れ合い様々な話を伺う中で、【人生の先輩として尊重する姿勢】を身につけていた。

今回の実習で、施設で実際に生活を営んでいる高齢者と関わる中で、より生活機能に重きを置いた観点から対象者を見つめる事が出来たと考えられる。

謝辞

本研究にあたり、実習にご協力いただいた施設のスタッフの皆様、調査にご協力してくださいました学生の方々に厚くお礼申し上げます。

引用文献

- 1) 厚生労働省:看護基礎教育の充実に関する検討報告書, 2007.
- 2) 看護行政研究会:平成22年度版看護六法. 新日本法規, 295, 2010.
- 3) 古村美津代, 中嶋洋子:特別養護老人ホームにおける老人-看護学実習の学習内容-実習記録の分析から- . 老年看護学, 5(1), 78-85, 2003.
- 4) 山田律子:生活機能から見た老年看護過程とは. 看護教育, 51(10), 850-853, 2010.
- 5) 北川公子:目標志向型思考で探索する高齢者の”持てる力”. 看護教育, 51(10), 856-861, 2010.

表 1. 高齢者看護学実習 I における学びの特徴

カテゴリー	サブカテゴリー	コード(一部)
高齢者の 特徴を体感	直に関わる中で特徴を実感	実際に話してみて、耳の遠さは人それぞれだと実感する
		先入観を持たず、実際に関わる中でわかる事は多い
	言動の背後にある 意味への気付き	繰り返して話される話は、生き方や言いたいことを反映している
		大声をあげたり、つねる行為にも理由がある
生活の場を 体感	生活の場であることを実感	車いす生活の中でも利用者が生き生きと生活している
		売店で買い物をするのができ、良い刺激となっている
	日常生活の中のリハビリ	継続できるように、楽しんで行えるようリハビリを考える
		レクリエーションを行うとき、いつも寝ている方も起きて参加していた
こまやかな 観察	表情や反応を観察し ケアに反映	状態には日内変動があり、それに応じてケアの方法を変える
		ケアを行う際に、表情にも注意をする
	状態を汲み取る工夫	食事介助の際、喉元が見えるよう衣服を整える
		コミュニケーションを取れない方もいるので観察が重要だ
	ケアを利用し 全身状態を観察	入浴の時には全身の皮膚状態を観察できる
		血圧測定の際に、腕の稼働域や皮膚状態を観察する
非言語 コミュニケーションの 体得	非言語コミュニケーション の実践	手に触れたり、ジェスチャーを取り入れてコミュニケーションを行う
		視線や指さしで意思疎通を図る
	コミュニケーションツール として自己を認識	笑顔で話を聞いていたら、一緒に笑ってくれた
		自分の表情を意識しながらコミュニケーションをとる
環境整備の 工夫	手順や物品を工夫	負担をかけないように短時間でケアを行う
		施設は安全・安楽が守られるよう設備が工夫されている
	残存能力を引き出す 環境整備	季節感のある掲示物など環境の工夫をされている
		より自立した生活を送る事が出来るように環境を整える
個別性を 尊重した 関わり	個別性を実感	多くの人と関わる事で、個性を認識できた
		認知症といっても症状や程度は人それぞれである
	残存能力に応じて 関わりを工夫	段階を踏んだケアを行い、自立できるように関わる
		声の大きさやトーン、言い回しを考えてコミュニケーションをとる
		利用者の ADL 状況や特徴を知った上で、ケアを行う
	肯定的なフィードバック	出来ている部分を褒めながらケアを行う
ペースを尊重したケア	利用者のタイミングに合わせて適切なケアを行う	
声かけの大切さ	声掛けを行うことで、安心感を与えることが出来る	
人生の先輩 として尊重 する姿勢	生活における役割の大切さ	施設であっても、役割を持ち生活してもらうことは大切だ
	相手を理解しようと 努力する姿勢	コミュニケーションが取れなくても、聞く姿勢を大切に関わる
		相手の背景や思いを把握した上で関わる
	人生の先輩として尊重	人生経験や価値観などたくさんのことを教えてもらった 自立を促すことは自尊心を守るケアにつながる